

IV 地域における祭りの重要性と持続・発展への課題

祭り班

伊丹慎一郎 三橋昂生 三宅惇也 山階佳奈

1. はじめに

過疎化、少子高齢化によって、農村地域では、伝統文化の継承が難しくなっている。都市近郊農村ではそれに加えて、混住化により新しい住民が増加することで、昔からの村運営を引き継いできた町内会の存在意義が弱まり、町内会が支えてきた祭りも維持されにくくなってきたとみられる。

都市近郊農村においても祭りなどの伝統文化は残っており、それらの価値を認識して受け継いでいくことで、地域の自治組織の持続に繋がるのではないだろうか。しかし、都市近郊農村での祭りは、祭りの担い手の減少や、住宅開発等による地域社会の構成員の変化、価値観の多様化などに伴い、縮小してきたと思われ、祭りの運営形態や仕組みの変化が求められている。また、混住化で移り住んできた住民を取り込むことや、次代の担い手である子供たちに確実に継承していくことも必要である。それにより、祭りが地域の活力となり、地域を支えるモチベーションに繋がるのではないだろうか。

福岡県福岡市の博多祇園山笠祭りでは、消滅の危機に対して、振興会を作るという祭りの仕組みを変える新たな取り組みを行った。また、子供の頃から自然に祭りに参加するように仕向けたこと、小学校に協力を求めたこと、他地域への積極的な宣伝活動を行ったことで、消滅の危機を免れたという（日比野・杉万 2011）。

2015年度3回生矢嶋ゼミでは、「都市近郊農村としての価値を発見する」という主旨で、2015年9を月16～18日の3日間にかけて、都市近郊農村で祭りが行われている加古川市西神吉町を対象として、祭りの変化と現状について聞き取り調査を行い、それに基づいて、地域における祭りの重要性を示し、祭りの持続・発展の手助けに繋げることを目的とする。

上記の研究目的を達成するため、2節では、消滅の危機を免れた博多部祇園山笠の取り組みを分析する。3節では、都市近郊農村である西神吉町の神吉八幡神社と各地区の祭りの変容と現状について明らかにする。4節では以上をふまえて考察を行ったのち、結論とし、祭りを持続させるための若干の提案を行う。

2. 地域の活力となっている地域にいた根付いた祭りにおける可能性

現在祭りを維持して運営することによって、地域コミュニティをより活発に運営・維持している事例に、福岡市博多区の博多祇園山笠が挙げられる。福岡市博多区は、人口22万8千人（2015年9月現在）で、祭りが行われる地区は、福岡市の中でも都市部であり、人口が多い。しかしこの祇園山笠は、大規模な祭りであるにもかかわらず主催が町内の振興会であることが特徴的である。全国的に見ても、町内会がこうした大規模なイベントを主催しているのはごくまれといえる。

博多祇園山笠振興会ホームページによると、この祭りでは、福岡市博多部が町、流にわけられており、これは明治時代に電気の普及による電線の敷設のため実際に動く昇き山笠と展示用の飾り山笠に分化されたことによるものであり、昇き山笠を担当しているのが流、飾り山笠を担当しているのが町に分けられている。中でも7つの流が大きな山車（山笠、ヤマと呼ばれる）を持ち出し、それを担ぎ、自らの流れを回ることがメインイベントの奉納行事であるとされる。一つの流は約600～1,000人で構成されている。このとき、重さ1トンの山笠を担いで（担ぐことを祇園では「かく」という）流れを回るときの速さを競

うことがこの祇園山笠の特徴である。

博多祇園山笠は、毎年7月1日から15日まで行われており、地区内外から多数の観光客が訪れるという。テレビ中継などもされる大規模なイベントでありながら、その主体が町内会であることと、子供用の子供山笠を行っていることに注目したい。

同ホームページによると、主体である祇園山笠振興会は、福岡市の夏祭り・博多祇園山笠を運営する団体で、祭りに参加する全流（舁き山笠、飾り山笠）で構成されている。博多山笠は、戦前まで山笠を建てる博多七流が順番で全体をまとめ、その年一番盛り上がり、「一番山笠」になった流が、翌年全体の流の世話をしてきた。しかし、戦後、新しい流の参加や、地域社会との接点が多くなるにつれて常設の組織が必要となり、博多祇園山笠振興期成会が結成され、1955年、博多祇園山笠振興期成会を発展させた博多祇園山笠振興会が誕生した。発足当時から各舁き山笠から選ばれた本部員と、その年の各流総務で“総務会”を作り、年5回、各流の山笠委員総会を開き、運営の細部まで討議して決定する仕組みを作ってきた（博多祇園山笠公式ホームページ）。

このように7つの流れでの登番を回してきた体制から、より大規模な振興会という団体を作り、全流が主体的に動く体制に変えたことにより、より大きな規模に成長したことがわかる。また、中野（2013）・立石・杉万（2011）によると、祇園山笠において使われる区分の（町、流）これは現在の行政区分ではなく、1966年以前の町名、区分であるため、祇園山笠の期間中のみ、通常とは異なるコミュニティができており、行政区分を超えたつながりができるのである。

一方で、子供山笠の活動がある。中野・立石・杉万（2013）によれば、1970年から始まったこの活動は7月1日から8日までの間、小学生以下の子供を対象に、地域の伝統を理解させるために行われており、4つの小学校が協力している。現在では、子供用として3つの山笠があり、実際に大人たちがかいている山笠の3分の2ほどの大きさで、重さは500kg程度のもを使用しているという。子供山笠の準備は授業の一環として行われており、祭り当日はPTA行事として参加している。さらにその時期の時間割は山笠に合わせたものとなっており、小学校が全面的に山笠に協力していることがわかる。このように地域住民、小学校と振興会の協力が地域社会と子供の繋がりを深めているといえるだろう。

また、土居流で2009年に行われた質問紙調査から、大規模化した祭りの中で、地域外からの参加者による比重の大きさが判明した。調査の結果、土居流の参加者は、地元住民が2割、残りの8割は地元外からの参加者であることが分かったとされる。他の流では、地元住民の参加比率が大きいところも見られるが、ほとんどの流において山笠は、実質的に博多部の祭りではなく福岡市としての祭りになっていることが明らかになった。これは、子供のころ博多で育ち、大人になってから博多以外に居住する人が福岡市内から集まるため、福岡市全体の祭りになっているとも考えられている。

しかし、山笠の中心メンバーは地元住民であり、地元住民を抜きにして山笠は存在しえない。現在の山笠は、子どもの頃から自然に参加し山笠が生きがいとなっている地元住民と、地元以外からの多数の参加者に支えられている。山笠での人間関係や達成感、地元以外の参加者にとって大きな魅力となっている。そうした地元以外の参加者の中には、流の中で地元の人と同様の重要な役職についている人も少なくない。また、山笠を担ぐ重要な役割も地元住民と分担し合っているとされる（日比野・杉万 2011）。

では、地元以外の参加者は、どのような理由で、山笠に参加するようになったのだろうか。日比野・杉万の調査の結果では地元以外の参加者の約6割は、知人から依頼されるか、自ら申し込んで10年以内に参加し始めた人達であった。大まかなイメージとしては、数年前から参加し始めた20、30歳代の人が地

元以外の 6 割を代表しており、最近参加し始めた若い人たちという印象がある。更に、祭りに参加している人たちの構成では、博多部外育ち・博多部外住居の人たちの半数を占めているという（日比野・杉万 2011）。

日比野・杉万の調査では、「山笠の魅力を一言で」という質問に対して、「人とのつながり」と回答した人が最も多かった。山笠を通じて味わうことができる人間関係が、大きな魅力になっているといえる。他にも、「生きがい」や「楽しい」という回答がみられた。地元以外からの参加者にとっても、山笠は日常から離れた非日常的なものであり、特殊性に魅力を感じているのではないだろうか（日比野・杉万 2011）。

菅野（2011）によれば、祭りを持続させていく上で問題なのは、共同体を創る共同感情のシェアの難しさである。信仰の軽薄化した現代において、共同感情として伝統的祭りに見られるような、神の存在を置くことは困難になっている。かといって、担い手が少なくなっている現在、伝統的祭りの維持という共同感情をシェアすることにも限界があるとされる。それに対して、今日の祭りは個人の自我を興奮、高揚させ、非日常的な至福の瞬間をもたらす、社会と個人を結びつける装置としての役割が求められているとされる。

祭りにおいては、先述した博多部祇園山笠のように、内輪の人間だけで楽しむのではなく、情報発信や呼びかけを行い外部の人間をうまく取り組んでいく事が重要であると感じた。祭りはどこか閉鎖的であるといった概念を取り払うこと、実際に祭りに参加してもらい祭りの独特の雰囲気、高揚感や楽しさといった感情を感じてもらうことが祭りを継続させていく上で重要になってくると考えられる。

また、先に述べたように博多祇園山笠は、様々な年代や団体が交流を持っていることが、より発展している要因としてあげられる。町・流同士では振興会が接着剤としての役割を持ち、大人と子供を繋ぐためには、子供山笠がその役割を持つ。中野（2013）では、こうした交流によって小さい頃から博多祇園山笠に対する意識が育まれ、その意識を待つ子供が大人になったとき、博多祇園山笠を盛り上げようと参加することが期待される。また、この毎年行われる交流によって継続的に所属する町・流と関わることができ、地域コミュニティが維持されているともいえる。

この博多祇園山笠は都市の祭りであることから、このような仕組みが成立するものと思われる。しかし、都市近郊農村では事情が異なると思われる。祭りの担い手不足も問題となっており、兵庫県播磨地方では、新聞に担い手募集の広告を出している神社や、祭りを運営する団体が担い手の募集を行うなどの取り組みがされているとのことで、実態解明が必要である。

都市近郊農村では、混住化の進展により、かつてのような農村の運営が困難になっているとみられる。本田（2010）は、まず徳野（2002）を引用して、混住化について「従来農家を中心として構成されてきた“ムラ”が、高度経済成長期以降、主として就業構造の変動と人口移入による急激な構成員の変化によって、従来の村落社会の構造的枠組みが変容」していく過程であるとした。そのうえで、農村内部では、兼業化と離農の増加により、従来からの住民の生活様式が都市に近くなってきた一方で、農村外部から都市的な生活様式をもつ住民の転入が増加したことが混住化によって引き起こされたことを指摘し、都市近郊農村において顕著に現れるとした。その結果、農村住民の多くがイエやムラを必要とせずに生活できるようになると同時に、住民も異質化してきたとしている。

上記のムラは、本研究では、現在町内会となっていて、祭り運営も担っている。本田が指摘する混住化の影響は、祭りにも影響を及ぼすものと考えられる。

そこで 3 節では、都市近郊農村において祭りがどのように持続してきたのかについて、加古川市西神

吉町に位置する神吉八幡神社と、都市近郊農村である西神吉町内の7地区を研究対象地域として、聞き取り調査から明らかにしていく。

3. 西神吉地区の祭り

(1) 神吉八幡神社の概要

①神吉八幡神社の由緒

西神吉地区の氏神である神吉八幡神社(写真1)は、西神吉町宮前字宮前に位置している。神吉八幡神社の資料によると、祭神はもともと、応神天皇(誉田別命)であり、称光天皇の1397(応永3)年に創立された。神吉の荘天下原村光山鞍馬字の境内に位置していたが、のちの神吉の荘大国村に遷座し、妙見大明神となったという。次いで、1441(嘉吉元)年におきた嘉吉の乱の兵火に罹り、社殿がすべて焼けてしまったため、聖武天皇の行宮(各地を旅して立ち寄った場所)と伝わっていた、現在の神吉町宮前地区の北にある山になっている地に社殿を建て、妙見山宝林寺中之坊妙見大明神と名を付け、大国村旧地を御旅所としたとされる。

1633(寛永9)年、落雷により、社殿其外の营造物のほとんどが燃え、1684(天和3)年5月24日に再建され、これが現在の社殿となったといえる

明治政府が神仏習合を禁じたことによって、神吉八幡神社と改名され現在に至っている。

②神吉八幡神社の祭礼

西神吉地区における最も大きな祭りは、神吉八幡神社の祭礼のひとつでもある秋祭りである。この祭りは、毎年10月の体育の日の前の土・日曜日に執り行われる。各地区では、神吉八幡神社によって、祭りの開催日時と執り行われる神事を書いたチラシの配布とポスターの掲示が行なわれている。また、富木町内会の富木攻さんによれば、神吉八幡神社では、1950、60年ごろから神幸行列のほか屋台が奉納されているという。終戦後地域復興と地域を活性化させるために屋台が奉納されるようになった。

神吉地区では1982年に屋台を新調し、同年の4月に神吉八幡神社境内でお披露目式が行われたという。屋台の形状は神吉、大国が神輿型の屋台、宮前は反り梵天の布団屋台をそれぞれ奉納している(写真2)。かつては鼎地区でも反り梵天の布団屋台が奉納されていたが1985年ごろに担ぎ手減少や継承、保存等の問題から屋台を処分し、奉納しなくなったという。

宮前地区町内会長の藤河昌信さん(75歳)によれば、宮前には戦前にも太鼓御輿と呼ばれる屋台があったという。戦後は戦前に使われていた屋台の骨組みを利用し、欄干、舁き棒などを作成し屋台を作ったというが老朽化により御輿屋台に買い替えたという。しかし18年ほど前「もう少し大きな屋台が欲しい」という声が出た為、姫路の屋台専門店「毛利工務店」で現在使用している屋台を購入したという。

大国地区町内会長の磯野さんによれば、子供のころ重さ2tほどの屋台があったが、担ぐ人数が集まらず、屋台を出せなかった。その屋台は神吉八幡神社下宮においていたが、子供たちが遊んでいるうちに壊してしまったという。2004



写真1 神吉八幡神社

2011年8月4日 矢嶋巖撮影

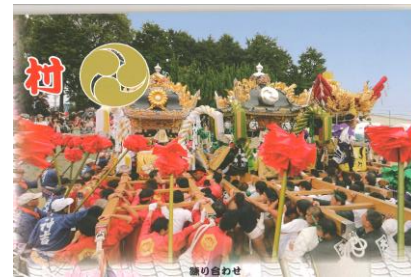


写真2 神吉、大国、宮前の奉納屋台

町内会祭りカレンダーから転載

年に姫路市大塩町中之丁から屋台を購入し、現在それを使用しているという。

この秋祭りの祭礼の一つに神幸行列がある。これは神吉八幡神社の氏神である応神天皇（誉田別尊）の神霊が宿った神体や依り代などを神輿に移して、氏子地域内に行幸したり、御旅所から元宮間を渡御したりするものである。なお、渡御の起源は明らかではない。

神吉八幡神社には、1820（文政3）年の奥書をもつ「祭礼絵巻」が保管されており、ここから、少なくとも江戸時代から神幸行列が行われていたことが推測される。この絵巻には、祭礼行列の様子が描かれており、かつての祭礼を知るうえで貴重な史料となっている。行列は小頭人（ことうにん）を中心にしたものと大頭人（だいとうにん）を中心にしたものと2つに分けることができる。この絵巻は加古川市指定文化財に1990年10月11日指定された。

広辞苑第5版によれば、神幸とは祭礼に際し、神体が神輿や御船代に乗って御旅所などに渡御することであることから、神幸行列が持つ意味としては、氏神が神輿に乗り、氏子町内を視察し、五穀豊穡を願ってはじめられたものと考えられるだろう。また神吉八幡神社の神幸行列を担当する順は、1宮前、2天下原（2）神吉、3神吉、4中西・西村、5大国、6鼎となっている。ただし、天下原は2順に1回の奉仕となっていて、天下原が抜けるときは神吉が2年連続で当番することになっている。

神幸行列によく似た祭礼が、高砂市曾根天満宮で行われている。それは、「一ツ物」と呼ばれており、兵庫県無形民俗文化財に指定されている。

曾根天満宮公式ホームページによると、一ツ物の言葉の由来については定かではないが、「万一の事故があっても他に変わることのできない唯一のもの」とされている。祭りの基本は、神々を迎え、お供えをし、神と人が饗宴を共にしたのち再び神々お送りするという形式をもつとされる。その中で一ツ物は目に見えない神の姿を「頭人」という形で具現化し、祭りの期間中頭人には神が憑依し、その子供が無意識に発する言葉を神の意志として受け取っていたと考えられる。そのため頭人は、馬に乗せられたり肩車をされたりして、地面に足をつけないように大切に扱われる。これは純粋な神（子供）をこの世の穢れに触れさせないようにする為であるとされている。一ツ物が神の意志を告げたとすれば、行事が聞き取り役であったと推察される。

加古川市教育委員会（1984）によれば、神吉八幡神社の神幸行列は、高砂市曾根天満宮の一ツ物と同じような形式、内容、ルールが大変よく似ているため、曾根天満宮同様、神吉町の過去の民俗を知るうえで、大変貴重なもので、現在も継続して行われていることは、全国的に見ても希少であると考えられる。

播磨学研究所（2005）によれば、播磨（現在の播磨）、印南（現在の加古川下流域）、賀古郡（現在の加古川と明石の二見町）には、景行天皇、神功皇后、応神天皇、仁徳天皇などが実際にこの地を巡幸したという話や、景行天皇が印南の女性に求婚を申し込みに行ったという話が播磨風土記に残っている。

また、播磨地方は古くから陸上の交通路として重要な位置にあったとされる。大和の南東部（現在の奈良県）から出雲（現在の島根県）、大和から備前（現在の岡山県）のルートの途中にあるため、様々な人が播磨地方を通ったと推測できる。

先に触れたが、景行天皇が求婚に行く際、大和から明石に、明石から印南に行幸したという伝承も残っており、播磨と当時の天皇家はゆかりがあると考えられる（浅田1996）。

また、浅田によれば播磨風土記には応神天皇の名前がよく挙げられており、応神天皇が名付けたとき

れる地名も実在している。加古川上流は由良川とつながっており、太平洋と日本海を分ける日本で一番低い分水界としても知られ、古代から交通路として重要な役割を担っていたとする。

播磨は、陸上の交通路として重要な位置にあったとともに、播磨と讃岐（現在の香川県）の海上ルートでもあったとされ、播磨風土記にも「印南郡大国里」と書かれている。これは現在の西神吉町大国地区のことである（上田 1996）。

また、神吉八幡神社宮司である喜多川さんによると、神吉八幡神社秋祭りの神幸行列の特徴は神輿の形にあるという。他地域の祭りでは、一般的に四角形の神輿が多くみられるが、神吉八幡神社の神輿は八角形であるという（写真3）。

加古川市教育委員会（1984）によると、絵巻物の中には、大頭人の行列と小頭人の行列総勢 260 人の参列者が描かれており、西神吉地区全体を挙げての祭礼だったといえる。

2015年9月の時点でもこの神幸行列は実施されているものの、すでに大頭人の行列は簡略化され小頭人のみになっており、西神吉町全体から各地区単位に分担され、人数も削減されて執り行われていた。

神幸行列は本宮である神吉八幡神社を出発し、西神吉町内を巡幸し神吉八幡神社下宮（西神吉町大国地区）の御旅所へと向かう（写真4）。

神吉八幡神社が氏子としている地域には、新しく住宅ができ多くの新規住民が移り住んできている。新興住宅が多くある大国地区町内会長の磯野さんによれば、大国地区では新規住民に対して祭りに参加してもらえるよう呼びかけ等を行っているが、実現にはなかなかつながっていないという。

（2）西神吉町各地区の祭りの現状

ここでは、神吉八幡神社の氏子である西神吉地区で聞き取り調査を行い、現在でも祭りが行われていることが明らかになった。ここでは、西神吉町のうち、大国、西村、中西、および隣の富木・長慶・西脇・清水の各地区を取り上げる。

①大国地区

大国町内会長の磯野幸信さん（60）によれば、大国地区では秋祭りのほかに、地藏盆、子供相撲が行われている。地藏盆は、大国地区内のお堂で毎年8月23日、24日に行われている。

子供相撲は、7月7日前後の土曜日、または日曜日に開催されており、午前中は七夕祭り、夕方から子供相撲となっている。以前は、小学校低学年から中学生までが参加していたが、低学年の子供の数が減ったため、現在では小学校5、6年生から中学生の男女数十人が参加している。また、大国地区の資料によれば、50年程前までは、中学1年生と小学6年生の男子が「お花」を集め、そのお金で景品を買い、相撲の勝負ごとに景品を公平に与えていた。また、土俵作りでは、土を掘り、細かく砕き、その上に製材所からもらってきた木くずを敷き、俵も藁をよって編み、毎年子供たちが作っていた。



写真3 神吉八幡神社祭礼絵巻

2015年9月16日祭り班撮影



写真4 神吉八幡神社下宮

2015年9月16日祭り班撮影

また、磯野さんによれば、現在では安全面などを考慮し、大人が付き添って相撲の景品の買い出しを行っている。土俵作りは青年会が行うようになり、土の上に製材所からもらってきた木くずを敷くのみで、俵も砂の入った袋を並べるだけになっている。

②西村地区

西村町内会長の田中昌利(71歳)さんによれば、西村町内会では8月24日に地蔵盆が行われている。子供から大人まで、60人から70人が集まる。西村公民館の横には観音堂があり、その中に三体のお地蔵様が祀られ、それぞれ薬師さん、文殊さん、観音さんと呼ばれている。現在も、年に3回祭りが行われている。

また、田中さんによれば、昔は子供を中心に子供会が運営し、子供が町内をまわって油銭(あぶらぜ)を集め、それで祭りの景品やお菓子、灯籠に火を灯すための油などを調達していたという。だが、子供が減少したため、現在では、隣保ごとに1年ずつ当番を回し、祭りの運営にあたり、油銭などを工面している。

西村地区では、毎年3月に西村地区の年間スケジュール確認のための会合があり、西村町内8隣保の会長が西村公民館に集まる。そこで祭りから草刈りに至るまでの行事を、事細かに決めているという。

また、田中さんによれば、西村地区では町内の祭りを世代間交流の場として活用するため、地蔵盆の日の夜7時ごろに町内放送を行い、観音堂の前に町内の人に集まってもらい、長老が先導を取りご詠歌が歌われている。その後、町内の人がお供えしたものを、持って帰ってもらっているという。

さらに、こうした祭りとは別に、西村地区では、地区の人たちに公民館に集まってもらい、簡単なゲームなどをして町内の世代間交流をする場を設けるなどの取り組みを行っている。

③中西地区

中西町内会長の藤原憲一さん(67歳)、大畑昭男さん(72歳)、釜江良一さん(63歳)によると、中西地区では、秋祭りの当番ではない時も、地区で祭りを行っている。屋台をもっていない地区で、当番以外の時も祭りを行っているのはこの地区だけである。

中西地区では、25年ほど前に干支神輿を製作した(写真5)。そのきっかけとなったのが、聞き取りをした大畑さんの活動である。30年ほど前に大畑さんが中西地区に引っ越してきた際に、祭りのときに子供がソフトボールをして遊んでいたことに疑問を持った。自分が小さいころ、祭りに参加した楽しい気持ちを子供たちにも味わってほしいということで、神吉八幡神社秋祭りで干支神輿を行うようになったのである。しかし、干支神輿は2012年になくなり、現在では子供神輿が行われており、その宵宮として、町内の人が集まり、カラオケ大会や寸劇などが行われている。

また、本宮では、子供神輿を担いでお宮に参っている。盆踊りも、1976年ごろは開催が中断されていたが、大畑さんが復活させ、今でも続けられている。盆踊りの時も、中西公民館のグラウンドに舞台を組んで、カラオケ大会を行っている。

秋祭りの際にも、他の地区では一般にはお花(お金や飲み物など)を持ち寄るが、中西では食べ物や飲み物を持ち寄り、オードブルを置き、誰でも自由に食べられるようにしており、住民同士の交流の場に



写真5 中西公民館所蔵干支神輿
一覧

2015年9月17日祭り班撮影

もなっている。

また、中西地区には薬師堂があり、薬師如来（地域の人には、お薬師さんと呼ばれる地蔵）が祀られている。昔は、五重塔が立っていたが潰れてしまい、現在では小さいお堂になっているという。なぜ潰れてしまったかは定かではないという。毎月 8 日のお薬師さんでは、お参りをしている人が中心となって行っている。藤原さんによると、中西地区は村をあげて何かをするのが特徴であり、住民同士も仲が良く、みんなが集まり、みんなで行事を行っているとのことである。

④富木地区

富木町内会長の久保寛さん（72 歳）、田中勉さん（86 歳）によると、富木地区では、観音さんと地蔵盆が行われており、地蔵盆は 24 日盆とも呼ばれている。観音さんが行われている観音堂にある地蔵には、面白い話がある。昔、祀られていた地蔵が何者かによって盗まれてしまったそうである。しかしある日、幡水池の水さらいを行っていた際、池から地蔵が出てきた。現在観音堂で祀られている地蔵は、そのときに池からでてきたものである。どこから来たのかは定かではないが、盗まれたものとは全く別のものであるため、富木地区には 2 つ地蔵が存在していたという。また、お盆の頃になると、盗まれた地蔵が、「播州に帰りたい」という言い伝えがあった。

⑤長慶地区

長慶町内会長の菅原悦夫さん（67 歳）によると、長慶地区では、現在地区単位の祭りは行われておらず、秋祭りの当番が何十年に一度回ってくるだけである。祭りという形態ではなかったが、大人がお墓に飴を隠して子供が探しに行く「飴玉隠し」という一種の度胸試しのような遊びが行われていたという。

⑥西脇地区

西脇町内会長の野村和秋さん（67 歳）によると、西脇地区では、地蔵盆と夏祭りが行われている。地蔵盆は、8 月の 24、25 日に行われており、主催は町内会である。しかし、運営自体は、老人会や子供会が中心となっている。夏祭りは、7 月の 13 日に行われており、昔は、夏祭りの際に子供相撲も行われていたが、現在では、大歳神社で子どもたちが宮司さんからお祓いを受けるという。

⑦清水地区

清水町内会長の野村公男さん（73 歳）によると、清水地区では、現在祭りのようなものは行われておらず、神幸行列が 28 年に一度頭番（頭人が回ってくる）が回ってくるだけである。ただし、秋祭りの時期になると地区内にのぼりを立てている。

また、毎月 17 日に老人会を中心に観音堂を開け、お参りしている。その他にも年に 1 回大歳神社に神吉八幡神社から宮司さんが来て祭事を行っている。

（3）祭りが抱える問題

聞き取りを行った結果、現状としてどの地区も少子高齢化が進み、子供の数が減少したこと、祭りの運営を担っていかなければいけない年代の若手が都市に流出していることなど、問題を抱えている状況が明らかになった。そのため、地区単位での祭りはもちろん、秋祭りの祭礼行事のひとつである神幸行列にも深刻な影響を与えている。

神幸行列は、小学校 1 年生から 4 年生が担当することになっている頭人について、子供の数が減少し、なり手が決まらないという問題を抱えている。昭和末期から 1997 年ごろまでは、頭人に選ばれることは子供にとってもその家族にとって光栄なことで、立候補によって頭人が決まっていた。しかし、頭人に選ばれると衣装や装飾品、神幸行列関係者への接待に至るまで、全て自己負担しなければならず、経済的に

問題となっていた。現在では京都の呉服店から衣装と装飾品をレンタルしているという。また神幸行列の際、頭人は馬に乗るが、これについては、乗馬クラブでの練習費の負担がかかる。そのため現在各地区では、頭人を選出する際、経費の半分を負担するなどの取り組みを行っている。

もう一つの問題は、秋祭りの際に奉納される屋台の担ぎ手不足である。現在宮前・神吉・大国地区から屋台が出されている。1985年頃までは、鼎地区からも屋台が奉納されていたとされるが、担ぎ手の減少により屋台を出さなくなってしまう。大国町内会長の磯野幸信さんによると、現段階で屋台を出す地区では、他地域（姫路や高砂）の屋台を担ぎたくても年齢的に担げない人に声を掛けたり、会社の人に声掛けするなどし、担ぎ手を集めている。

これらの問題はここ数年で起きたことではない。長期におよぶ人口の減少傾向、特に若い世代の流出がこの問題をさらに深刻化させているという。聞き取りの中でも、今後も屋台を出したい気持ちはあるが、その対策を行う人は少ない。そのため祭りの規模が小さくなっているのはわかっており、今後もさらに縮小していくと感じているものの、どうしようもないという話がほとんどの地区で聞かれ、このことから諦めにも感じられた。地域全体で対策を進めなければこの問題は解決しないだろう。

4. 結論

本研究では、祭りの重要性を明らかにし、祭りを持続、発展させていくことを目的に、加古川市西神吉町の祭りについて検討した。

2において博多祇園山笠では、振興会が祭りを運営しているのが特徴であった。7つの流で当番を回してきた体制から、振興会を作り全体的に統括することで、祭り自体がより大規模なものになっていったことが明らかになった。また、博多祇園山笠の参加者は、8割が地元外からの参加者であった。しかし、参加者の中心メンバーは地元住民であり、子供のころから祭りに参加している人々であった。子供山笠では、準備が授業の一環として行われ、小学校が全面的に祭りに協力している様子が窺えた。また、地元外からの参加者でも、祭りにおいて重要な役職についている人もいるなど、地元外の住民も責任を担うしくみが作られていた。さらに、様々な年代が流や振興会を通して交流を持ち、大人と子供が子供山笠を通して交流できていた。

研究対象とした加古川市西神吉町では、祭りの担い手不足が問題となっている。神吉八幡神社の神幸行列では、子供の数が減少したため頭人のなり手が決まらず、秋祭りの際に奉納される屋台も、担ぎ手が減っていることが問題となっている。また、現在神吉八幡神社からは、ポスターと回覧板で日時や場所、祭礼内容が案内されているに留まっており、他地域への発信などの対応の余地がある。各地区単位の祭りでは、子供の数が著しく減少したため、祭りが大人主体のものに変化してきた。

そこで、西神吉町においても、西神吉町内連合の中に祭りに関する祭り実行団体を作ることで、より広域的に対応できないだろうか。それにより、祭りの企画運営や、人数の工面、広告の手配なども行うことができるのではないかと。また、現在会社の同僚や友達に声を掛けて担ぎ手を確保している地区もあるが、各地区単位での取り組みには限界があるとみられる。実行団体を設けることによって、大規模な情報発信や他地域からの問い合わせにも積極的な対応が可能になり、地区の負担も軽減されることが期待される。

次に、各地区で行われている祭りに関しては、西神吉町は都市近郊農村であるため、昔から住んでいる農家と、新興住宅に移り住んできた世帯が混在していて、徳野（2002）が指摘したように、祭りの継承

が難しくなっている。昔から住んでいる人にとって祭りは、生活の中に溶け込んだ文化であっても、新しく移り住んだ人が、その地域に根付いた文化への理解をするのは容易ではない。こういった溝を埋めるためには、昔から住んでいる住民から新しく移り住んできた住民に対して、積極的な祭りへの参加呼びかけを行い、気軽に参加できる雰囲気作りをするとともに、繋がり人が集まるような仕組みづくりが求められる。地域内の小中学校の児童や生徒、企業等に呼びかけを行い、「祭りに参加したい」と思わせるような地域住民に対してのアプローチが必要である。

小学生の時から長く祭りに参加し、何のために祭りが行われているのか分からなくても、参加する中で、祭りに対する愛情が育まれていくことが大事である。また、自分の地区で伝統文化である祭りが継続して行われていることに対して「誇り」を持つこと、祭りに対して「楽しい」という共同感情を持つようになることで、大人になっても祭りに参加するために地元へ帰省したり、地域に住んで長く祭りに関わる人材となっていくことが期待できる。

祭りは地域に根付いた文化であるとともに、その地域の自治組織が持続、機能していく上で、重要な役割を担っていると考えられる。西神吉町各地区の祭りが町内会によって運営されていることから分かるように、その地域の自治組織の持続や機能にも関係している。これからも祭りを保存・継承していくことが、地域の発展や住みやすい故郷作りにも繋がるのではないかと。

祭りは地域に根付いた文化であり、地域の宝であるといえる。祭りに参加することでその地域の特性が理解できるほか、地域の人と深い付き合いができる。祭りに参加し、地域住民と関わることによって面識が増え、子供にとっては安心できる町となることが期待される。祭りも一因となって形成された住民間の信頼関係も、祭りによってさらに深くなるだろう。人間関係が希薄化したといわれる現代において、祭りは人と人をつなぐきっかけになる事が期待される。

なお、今回の研究の中で、神吉八幡神社秋祭りの屋台について触れたが、不明点が多く、詳細については今後明らかにしていく必要がある。

<参考文献・ホームページ>

浅田芳郎（1996）「播磨を通った古代の道」播磨学研究所編『播磨国風土記—古代からのメッセージ—』神戸新聞総合出版センター、pp.189-211

加古川市教育委員会編集発行（1984）『加古川市文化財調査報告 8 加古川市の民俗』

菅野佐織（2011）「祭りによる地域ブランド価値創造のフレームワーク—交流する地域ブランドを目指して—」マーケティングジャーナル 30-4、pp.15-29

徳野貞雄（2002）「現代農村の内部構造と混住化社会」鈴木広監修、木下謙治・篠原隆弘・三浦典子編『地域社会学の現在』ミネルヴァ書房、pp.217-238

中野苑香・立石武泰・杉万俊夫（2013）「博多祇園山笠と子どもたち—地域が子どもを育む—」集団力学 30、pp.362-407

播磨学研究所編（2005）『播磨の民俗探訪』神戸新聞総合出版センター

比野愛子・杉万俊夫（2011）「祭りを支える人々—博多祇園山笠の事例—」集団力学 28、pp.42-65

<参考ホームページ>

博多祇園山笠公式サイトホームページ（2015年11月23日閲覧）

<http://www.hakatayamagasa.com>

中谷連中のホームページ「秋祭り」(2015年11月24日閲覧)

<http://www.nakatani-renjyu.net/matsuri.html>

加古川市の祭り「播州祭り行脚」(2016年3月3日閲覧)

<http://namerakozo.web.fc2.com/framekakogawa.html>

曾根天満宮ホームページ「山笠の歴史」(2016年3月10日閲覧)

<http://www.tenmangu.net/matsuri/matsuri.htm>